様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４３０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ２３１１９

研究課題名（和文）移民社会におけるパブリック考古学を通じて考古遺産を利用したアイデンティティ再構築

研究課題名（英文）Identity reconstruction using archaeological heritage through public archeology in migrant societies.

研究代表者
古手川　博一（Kotegawa, Hirokazu）

京都外国語大学・京都外国語大学ラテンアメリカ研究所・客員研究員

研究者番号：３０８５２３７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：異なる出身地を持つ移民で構成される集落では、アイデンティティの共有が難しく、それが原因となり各家庭や個人を結びつけて地域社会を発展させることを困難にしている。そこで、現在彼らが住んでいる土地に存在した古代文化の遺跡をシンボル化し、それを紐帯とした新たなアイデンティティの構築を促すことを目的として研究を実施した。その結果、戦略的には間違っていないが、その戦略が功を奏すにはさらに時間が必要であることが判明した。また、遺跡をシンボル化する過程において様々なデジタルツールの有効性が認められるが、対象地域によってはほとんど機能しないこともあり、それに変わるツールの模索が必要であることも明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今日のグローバル化された社会は、様々な出自を持つ異なるアイデンティティを持った人々の集まりであると理解できる。その様な多様化した構成員を持つ社会が効果的に発展を続けるためには、構成員の協力が必要であり、その際に共通したアイデンティティが各構成員の結びつきを強固にすることができると考えられる。そこで、その土地の考古遺産をシンボル化することによって、その社会の構成員が共有することができる新たなアイデンティティを構築することを目指し、そのためにパブリック考古学的手法を採用し具体的に実践した。結果、この戦略を継続することによる将来的な有効性を示すことができたが、幾つかの解決すべき課題も見つかった。

研究成果の概要（英文）：In villages of immigrants from different origins, it is difficult to share an identity, which makes it difficult to connect families and individuals to develop the local community. Therefore, we conducted research with the aim of symbolizing the ruin of ancient culture that existed in the land where they currently live and promoting the construction of a new identity with them as ties. The results show that the strategy is correct, but it takes more time for the strategy to work. In addition, although the effectiveness of various digital tools was recognized in the process of symbolizing archaeological sites, it became clear that it may not function very well depending on the target area, and it is necessary to search for a tool to replace it.

研究分野：考古学

キーワード：アイデンティティ　移民　考古遺産　パブリック考古学　シンボル化　情報共有　デジタルツール

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
研究開始当初、本研究対象となったサン・イシドロ村及び同村が帰属するサユーラ・デ・アレマン市の人々から、この土地に特有のアイデンティティが持てないという話を聞いていた。その原因は、特にサン・イシドロ村は歴史が浅く各家庭が他地域からやって来た移民であるために、彼らが現在住んでいる土地と深い関わりが見つからないということにあると考えられた。このような移民社会における市民のアイデンティティの喪失という問題は、現代の社会では世界的に見られる問題であると考えられ、何らかの解決策が必要であると考えられた。

２．研究の目的
共通のアイデンティティを持つことができない移民の村人たちに、彼らが住んでいる土地に存在するオルメカ文化という世界的に有名な古代文化の遺跡を土地のシンボルとして認識してもらう。そして、そのシンボルが村人全員の紐帯となるように、それに関する考古学的情報をパブリック考古学的手法によって村全体に普及することにより、このシンボルに対して親近感と誇りを持ってもらい、このシンボルを基盤とした村人共通のアイデンティティを全員で再構築することができるように援助することが研究の目的である。

３．研究の方法
⑴研究開始時の村人及び周辺地域の人々の意識調査を現地でアンケート調査やインタビューを実施する。本研究のテーマに沿って、アイデンティティに関する理解を知ることが主要な目的であったが、同時に彼らの基本情報の収集と考古学全般に関する理解についても調査した。

⑵本研究申請時は、パブリック考古学活動に利用する考古学データを得るために、サン・イシドロ村にあるオルメカ文化のエステロ・ラボン遺跡でボーリング発掘調査を実施し、出土遺物や発掘データを収集する予定であったが、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックで発掘調査が実施できなくなった。そこで、以前の発掘調査で得られたデータのみで当遺跡の考古学情報を村人たちに提供するために、本研究申請当初に計画していたパブリック考古学活動を再検討し、再構築した。

⑶前述のように、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの影響を考慮して、パブリック考古学的手法による考古学情報普及活動をインターネットなどを利用したバーチャル空間での非接触的活動を積極的に行うように軌道修正した。その際、現地の人々との連携は主に村の代表者や市役所の関係者との WhatsApp を利用したコンタクトや、プロジェクトのページが設置されているフェイスブックを利用して情報の拡散に努めた。

①ジグソーパズルを使った考古学情報の発信（写真１左）。ジグソーパズルの作成にはプロジェクトで撮影した様々な写真を使って、Jigsawplanet.com の無料サービスを利用した（写真１右）。2020 年 6 月下旬から始めて、週末の金曜日から日曜日にかけて毎日 1 枚ずつ画像に関係する簡単な考古学情報を付けて、フェイスブック上に開設されているエステロ・ラボン考古学プロジェクトのページを利用して発信した。同年の 12 月最終週まで継続し、全部で 132 枚のジグソーパズルを作成し発信した。60～80 ピースのジグソーパズルを主体として大人も子供も楽しみながら、それぞれの画像に関わる簡単な考古学情報を得ることができるように作成した。

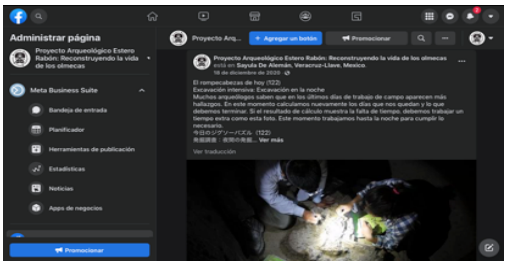

写真１　フェイスブックによるジグソーパズルの発信（写真左）とジグソーパズル（写真右）

②これまでのエステロ・ラボン遺跡での発掘成果を、Peaple Art Factory という媒体を使ってバーチャル写真展（https://peopleartfactory.com/g/erQeYFjDHrpsdfaC2XOi）を開催して普及することを試みた。そこでは、サン・イシドロ村にあるオルメカ文化のエステロ・ラボン遺跡を中心に、古代のサン・イシドロ村を発掘時の写真資料を大量に使うことによってビジュアル的に理解してもらえるように工夫した（写真２）。

写真２　バーチャル写真展

③フェイスブックに見られる情報の中からオルメカ文化に関連する情報を積極的にプロジェクトのページで再発信した。特に新型コロナウイルス感染症のパンデミックの期間に増加した、オンライン講演会などの情報は積極的に再発信して考古学情報の普及を目指した。同時に、オルメカ文化がどれだけ世の世の中で注目されているのかを示すことも目指した。

⑷上記のようなインターネットを利用した遠隔地からの活動以外にも、現地に赴いてのパブリック考古学活動も継続した。理由は、研究調査対象地が都市部から離れており、経済的にも貧しい共同体である上にインターネットを利用するための十分な設備がないためである。

①主要な現地での活動は村人たちに対面で講演を行い（2020 年 1 月、2021 年 1 月、2022 年 1 月の計３回）、考古学全般、オルメカ文化、そして彼らが住むサン・イシドロ村にあるエステロ・ラボン遺跡に関する基礎的な情報を提供した（写真３左）。現地での活動は彼らと直接対話することによって、彼らの疑問を明確に解決することができる。また、実際に村を訪れるという行為そのものが、この土地にある遺跡に興味を持つ考古学者がいるということを村人たちに再確認することを促すことができると考えられる。

写真３　サン・イシドロ村での講演風景（写真左）と子供向けビンゴゲーム大会風景（写真右）

②2020 年 1 月には、講演会とともに前述の第 1 回目のアンケート調査を実施し、この機会を利用して 2018 年に同じベラクルス州にある別の町の博物館で実施した当遺跡の調査に関する写真展で利用した展示パネル（ビニールシート製）と写真をサン・イシドロ村に寄贈し、村中心部に作られたドームを持つ広場に展示した。

③2021 年 1 月には、実際に現地を訪れて講演をした際に、市役所の援助を受けてエステロ・ラボン遺跡とサユーラ・デ・アレマン市内にある様々な遺跡についての簡単な冊子（全 41 頁）を作り、村人たちに配布した（およそ 20 家族分と小学校と幼稚園）。

④2022 年 1 月にサン・イシドロ村を訪れた際には、講演会とアンケート調査の他に、各家庭に保管されている考古遺物の記録のために写真撮影を行い、村で保管されているオルメカ文化の石彫の保護柵も設置し、考古遺産の大切さを示す試みを行った（写真４）。

写真４　サン・イシドロ村に保管されているオルメカ文化石彫の保護柵

⑤2022 年 1 月の訪問時には、講演会終了後に子供達向けに作成した考古学情報の画像を使用したビンゴゲーム大会を実施した（写真３右）。

⑸最終的には、前述のようなサン・イシドロ村にあるエステロ・ラボン遺跡について様々なパブリック考古学的活動が、村人たちのアイデンティティに関する認識、そしてその形成にどのような影響を与えたのかを確認するためのアンケート調査を最終年度である2022年1月に実施した。その後、第1回目のアンケート結果と比較することによって今回の調査の効果を数量的にそして質的にも分析して解釈を試みた。

４．研究成果

研究対象となったメキシコ合衆国ベラクルス州サユーラ・デ・アレマン市サン・イシドロ村は、おおよそ20家族150人ほどが住む小さな村である。

2020年1月に現地にて彼らのアイデンティティに関する意識調査をアンケートによって実施した結果（回答者：女性22人、男性12人。11歳から60歳が79%を占める。回答者数の73%がサン・イシドロ村在住。）、30名が「アイデンティティ」という概念を知っていると答え、それを持っていると答えている。しかし、その概念が何を意味するのかという問いにはばらつきが見られた（文化・伝統55%、言語10%、土地22%、それらを併せたもの10%）。また、アイデンティティの形成に何が影響すると考えられるかという問いには、回答者の41%がその「出自」と答えている。それに続いて「個人の特徴」が18%、「文化」が9%となっている。そこで彼らの出自を見てみると、41%がサン・イシドロ村以外のサユーラ・デ・アレマン市と答え、同じベラクルス州内の他市が15%、州外も3%見られた。ちなみに、サン・イシドロ村と答えた人が3%いたということは、すでに移民三世代目を中心とする家族があると推測される。これは自分の家族がいつサン・イシドロ村に移住してきたのかという問いに対して24%が1950年以前と答えていることからも納得できる（これらの家族は70年以上、そして、いくつかの家族はすでに100年以上この地に住んでいることになる）。また、それ以降の移住も定期的に続いていることも明らかになった（1950-1975年20%、1976−2000年12%、2001年以降18%）。

これらの結果を統合すると、サン・イシドロ村の住民の多くは「アイデンティティ」というものを「文化や伝統」として理解しているが、その形成には「出自」が大きく関わると考えている。そして、回答者のうち1人しか自分の家族をサン・イシドロ村出身と自覚していない。これは事前情報とよく一致する結果となった。つまり、大多数の村人のアイデンティティはサン・イシドロ村と繋がっていないということになる。

また、サン・イシドロ村についてその歴史を知っているかという問いには、26%の回答者しか「よく知っている」と答えることができなかった。そこで、この地域の考古学的情報についての知識を知るために、どのような古代文化を知っているのか質問すると、30人がこの地域特有のオルメカ文化を知っていると答え最多となった。続くのはマヤ文化が22人でそれ以外は10人以下の回答となった。つまり、村自体の歴史は知らなくても、地域の歴史は多少なりとも知っているということになる。そして、それ以外の古代文化についても10人近い人たちが他地域のいくつかの古代文化名を挙げているということは、古代文化に興味を持つ人々が30%ほどはいたということになる。これらの古代文化に興味を持つ人たちは、近隣あるいは遠方の古代遺跡も訪問しているようである（サン・ロレンソ遺跡（ベラクルス州オルメカ文化）10人、エル・タヒン遺跡（ベラクルス州トトナカ文化））2人、チチェン・イツァ遺跡（ユカタン州マヤ文化）2人）。しかし、オルメカ文化に関する詳細な知識は持っていないようであった。

上述のアンケート結果から、サン・イシドロ村にあるオルメカ文化の遺跡を、この土地のシンボルとして多くの村人たちに認識してもらうには、それについての十分な情報を提供する必要があることが再確認された。しかし、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの影響により発掘調査は実施不可能となったため、2013年から2015年までに実施した発掘調査結果を利用して、直接的な接触のないインターネットのバーチャル空間を主要な活動の場として、パブリック考古学的手法を用いた情報提供を実施することにした。以前は携帯電話の電波すら届かなかった村であったのでインターネットの利用には若干の不安があったが、幸いにも、近年では携帯電話の電波も届きインターネットにも接続できるようになったと聞いていたので、この機会に、どの程度インターネットを利用した情報伝達がサン・イシドロ村のような地方の小集落でも効果を発揮できるのかを調べることもできると考え、実施することにした。

このバーチャル空間での情報普及活動は、無料で簡単に準備できてすぐに実施できたものと、準備に有料で手間のかかるプログラムやプラットフォームを必要とし予想以上に時間がかかったものがあった。これは、今後同様の活動をする際には事前に十分な下調べと利用方法を検討する必要があることを示している。研究計画当初には予定していなかった様々な活動を実行することになったが、それが結果的には今後の新たな方向性を模索する上で大きな助けになった。

「３.研究の方法」で述べた様々な活動によって、2020年1月から2021年12月まで村人たちに考古学、オルメカ文化（地域独自の古代文化）そして、エステロ・ラボン遺跡（村に位置するオルメカ文化の遺跡）について情報提供を実施した効果を測るために、2022年1月に再び村人に対してアンケート調査を実施した（回答者：女性26人、男性17人、性別未回答6人。11歳から60歳が80%を占める。回答者数の90%がサン・イシドロ村在住。）。その結果を見ると、36人（74%）が「アイデンティティ」が何か知っていると答え、38人が独自のアイデンティティを持っていると答えている。ここでは、それが何なのか知らないが持っていると答えている

人がいるという点に注目して欲しい。この答えからも、そしてその他のアイデンティティに関する理解を問う問いの答えからも、本当に「アイデンティティ」が何なのかを理解している人はもっと少ないのではないかと推測される。これは、アイデンティティという概念の意味の広さを考慮すると、おそらく彼らに限った結果ではなく、世間一般的にも同様の状況が観察されるのかもしれない。しかし、ここでは彼らがアイデンティティという概念を理解していないかもしれないという点が重要となる。本研究では、事前情報や最初のアンケート結果をもとに、アイデンティティが何なのかという点は村人たちが理解しているという前提で調査を実施したが、この点をもう少し、深く追求して調査をした方が良かったのかもしれない。
また、サン・イシドロ村の歴史について知っているかという問いには、ほんの 6%（3 人）しかよく知っていると答えられなかった。これは、もしかするとサン・イシドロ村の外に住んでいる土地の所有者（村の設立に関わった人たちやその家族）の回答が前回よりも大きく減っていることに起因するのかもしれないが、さらに分析する必要がある。そして、考古学的な知識についは、31%がオルメカ文化を知っていると答え、マヤ文化がそれに続き 20%となりほぼ前回と同様の傾向を示している。それ以外にも 1%（1 人）から 12%（14 人）がその他の古代文化を知っていると答え、訪れたことがある遺跡に関しては、16 名が近隣から遠方の遺跡を列挙しており、どちらの設問の回答も前回よりもバリエーションが増えている。特にサン・イシドロ村（恐らくエステロ・ラボン遺跡を指していると思われる）を挙げた人が 1 人いたことは注目したい。また、どこでオルメカ文化について教えてもらったかという問いに、この設問の回答者中最多の 14 人（45%）がエステロ・ラボン遺跡を挙げているということは、彼らが、前年度までに行った講演会を聞きに来ていたということ、そこでオルメカ文化について学んだと自覚している点は注目して良い。また、どこでオルメカ文化の遺物を見たことがあるかという問いには、初年度のアンケートでは博物館、学校、本、テレビ、インターネット、自宅や友人・親戚の家という回答が 10%から 18%の間でほぼ均等に分布していたが、最終年度の調査では、サン・イシドロ村という回答が最多の 52%を占め、２位のサン・ロレンソ遺跡（近隣にあるオルメカ文化の首都の遺跡で博物館もある）の 27%を大きく引き離し、その他の博物館や家庭などは 6%以下となり、そのバリエーションも減っている点は、ここに来てようやく、村人たちの間でサン・イシドロ村に保管されているオルメカ文化の石彫が重要な考古遺物であるという認識を得るに至ったのではないかと考えられる。つまり、およそ２年間にわたって実施してきた、パブリック考古学的な手法を用いた情報の拡散が効果的に機能したことを示したと言える。
しかし、残念ながら今回の実質２年間超の短期間の調査では、村人全員がオルメカ文化の遺跡を基盤とした共通のアイデンティティを持つまでには至らなかった。多くの村人たちの関心を集めることは出来ている様なので、戦略的な方向性は間違っていないと考えられるが、それを浸透させるにはより多くの時間と緻密な計画が必要であるということが理解できた。
研究調査実施中に予期しなかった新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが発生したために、当初の予定を大きく変更して非接触空間であるインターネットを経由したバーチャル空間の利用を積極的に試みた。これは、予想していなかった全く別の利点と問題点を浮き彫りにした。つまり、バーチャル空間の利用は、世界から「距離」という物理的な問題を解決してくれたことは今回のパンデミックで世界中の人々が様々な分野で実感したことである。それにより、今まで必要だった長距離を移動する時間や経済的な負担が一気に消滅することになった。上手にこの利点を使うことができれば、今後様々な活動がより効果的に実施することができることが予測される。しかし、我々の調査では、問題点も浮き彫りにすることができた。一番の問題点は、まだ世界には十分に科学技術の発展を享受できない地域もあるということである。我々が調査を実施した集落は、つい数年前までは携帯電話の電波すら届かない環境で、ようやく少し前に改善された携帯電話の電波を利用してインターネットに繋がることができるようになったばかりである。さらに、この集落の住人の多くは地主から土地を借りて小規模農耕を行う者や、地主が経営する牧場で雇われたり、地主の土地を整備したりする際に日雇い的に働く人たちが殆どである。つまり、住人の多くが経済的には恵まれていないという実情があり、彼らにとってインターネットに接続できるデバイスを持つことや、携帯電話の電波を経由するという高額な方法でインターネットに接続するということは簡単なことではないのである。つまり、今回の研究調査で実施した、考古学的遺産を地域のシンボル化して独自のアイデンティティの形成を援助するという戦略は、概ね間違った方向には向いていないと思われるが、このシンボル化の過程で十分な効果を得るには、サン・イシドロ村のような辺境の貧しい集落ではインターネットというテクノロジーの利用があまり効果的ではないという点も明らかになった。つまり、今回の調査では遺跡のシンボル化の過程で大きな効果を示したのは村人たちに直接語りかけた講演会や写真展（バーチャルではなく実際のパネルを使用したもの）であったという点を今後の活動を続けていく上で、考慮する必要があるということである。
また、前述のように、今回研究対象となったサン・イシドロ村は非常に小さな集落で、土地の所有者は村の外に住んでいる場合が多く、村の住人の多くは地主の雇用者家族である。村の外に住んでいる土地の所有者も、比較的頻繁に村を訪れるが彼らの意識は多くの村人たちとは異なるようである。しかし、今回の調査ではアンケート結果で彼らを区別することができなかった。今後は、彼らの意識の違いにも留意して活動を続けていく必要があると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 古手川博一	４．巻 46
２．論文標題 新型コロナウイルス影響下における考古学調査と現地の共同体：メキシコ合衆国ベラクルス州南部の事例	５．発行年 2021年
３．雑誌名 古代アメリカ学会会報	６．最初と最後の頁 9-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 古手川博一	４．巻 45
２．論文標題 ホンジュラス国内の大学教育と国外での研究活動へのCOVID-19の影響について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 古代アメリカ学会会報	６．最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 古手川博一
２．発表標題 Proyecto Arqueologico Estero Rabon
３．学会等名 La diversidad creativa de los veracruzanos (Instituto Veracruzano de la Cultura)（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 古手川博一
２．発表標題 ベラクルス州南部の文化変容と維持：エステロ・ラボン遺跡の考古学調査による事例研究
３．学会等名 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所第12回IELAK研究会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

前述の学会発表１番目に示したInstituto Veracruzano de la Culturaによって開催された「La diversidad creativa de los veracruzanos」での講演を録画したものを一般向けにYoutubeで公開している（スペイン語）。 Hablemos de Arqueologia（考古学について語りましょう） https://www.youtube.com/watch?v=cXeMONy_HOk&t=71s

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
メキシコ	Museo de Antropologia de Xalapa	サユーラ・デ・アレマン市役所	Instituto Veracruzano de la Cultura	他1機関